白珠

十二月號

昭和二十二年五月十九日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十六年五月二十一日国鉄特別扱承認雑誌第一、九七六号
昭和三十年十一月二十一日印刷　昭和三十年十二月一日発行

第十卷　第十二號

昭和二十二年五月十九日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十六年五月二十一日国鉄特別扱承認雑誌第一、九七六号
昭和三十年十一月二十一日印刷　昭和三十年十二月一日発行

白珠　SHIRATAMA

通卷百七号

定価六十円

立原道造のこと

田中克己

立原君にはじめて会つたのは、昭和十二年の夏、信州追分の油屋でのことであつた。こゝは中仙道の宿場で、宿は旧の脇本陣、その昔ながらの建物の中に大名のやうに堀辰雄さんがゐて、立原君もそのお小姓のやうに夏休みを利用してであらうが、控へてゐるのを、宿に着いてすぐ知つた。大阪の中学に勤めてゐた私も、夏休みを利用しての上京に、三好達治氏から誘はれて、堀さんに会ふのを第一目的に、はるばる信越線で参上したのである。

お客と仕事の多い堀さんとは、ゆつくり話すひまはなかつたが、立原君とは年齢のせいもあつてすぐ親しく話すやうになつた。たゞし彼はその春、大学を卒業したばかりで、石本建築事務所に、技師か技師補かで入所したばかりで、まだ学生らしいところはとれてゐなかつたが、三つ年上の私はもう教師を三年もつとめ、妻あり、子ありといふので、さぞかし兄貴ぶつた顔をしてゐたことであらう。立原君はそれを打ち消すやうに、盛んに私をいぢくつた。たとへば、三好さんが中仙道を散歩して来るのを見ると、私を誘つて道傍の藪の中にかくれ、おどかしませう、といふのである。苦笑しながら私も一緒に隠れ、やがて三好さんがそばへ来ると「ワツ」とかけ声をして飛び出して行つた。三好さんはあまりびつくりしたやうでもなかつたが、私は随分てれながら、彼につゞいて隠れながら出て行かなければならなかつたのを、今もおぼえてゐる。

川端さんの宿、室生さんの軽井沢のお宅にも彼が案内した。さうして黙つて坐つてゐる彼に並んで、私はこれらの大先生に会はなければならなくなつた当惑を隠すことが出来なかつた。同じく都会生れでありながら、江戸ッ子と大阪人とでは、これだけちがふのかと、何かいまいましくて、翌年故郷の大阪をはなれ、上京して行つた理由にもこの時の印象が大分つよくひゞいてゐる。

上京してからは、それゆゑ立原君とはかなり往来した。「四季」の編集同人としての往来以外にも、たびたび会つてゐる。年齢の近い津村信夫君よりは、もつと話しやすく、もつと手ごたへがあつた。死んでから出た全集を見てはじめて気がついたことだが、彼の方でも私が所属してゐる「コギト」――この雑誌のことはもう

知つてゐる人も少いと思ふが――に非常に関心をもち、いやもちすぎるほどもつてゐたので、会ひたがつてゐた。ではどんな点で関心をときかれると、ちよつとたやすくは説明しにくいが、彼は「コギト」をドイツ浪漫派のあとつぎのやうに考へ、その浪漫的といふ点では強い関心をもつた。ドイツ浪漫派が中世を理想化したやうに、私どもも新古今あたりを理想としてゐるやうに考へて、その点からも話したがつたやうである。しかし少くとも私は、新古今はきらひで、立原君を失望さしたらうと思ふ。私の詩集の出版記念会に出て来た彼に、他の人がたとへお座なりでもほめてくれるのを、変な顔をして聞いてゐたが、自分の番になると、何だかわけのわからぬ云ひ方をして坐り、あとで、もつとひどい悪口をいふところだつたが、あまり皆がほめるので気おくれしたといつた。

一体、立原君の詩の特徴は、誰でも気づくやうに非常に新古今的である。少くとも私の好きな万葉的ではない。

いま　だれかが　呼んでゐる……ああ　しかし　私は答へない
私の名を　おまへ　だれでもないひとに

これが彼の代表的な詩（さびしき野辺）の一齣である。こゝにあらはされるのは情緒だけである。それ以外はみる詩の世界から除外しなければならないと意識し、その通り実行してゐる。政治も社会も、現実の生活と同時に伝説さへも一応排除する。いちじるしく目につく漢字や漢語は絶対に用ひない。七五調ではないリズムはありさうだが、これもこの淡いいはば無色透明な情緒そのものに内在するのであつて、ことばやその連鎖の中にあるのではない。いくらか伊東静雄に似てゐるが、さらに純粋である。

これが新古今的であるかどうか、一度専門家である安田章生さんに伺つて見たいとも思ふが、ともかく立原君自身はかう云つてゐる。

「この宿屋には、もう夏からずつとゐるのは僕きり。……さみしいといへばさうかも知れないが、ひとり炬燵にはひり、本をよんでゐれば、たのしいといふ方がいい。よんでゐるのは、蒔原定家歌集。（秋の夜のかがみと見ゆる月かげは昔の空をうつすなりけり。）（いまぞ思ふいかなる月日ふじのねのみねに烟の立ち初めけむ。）これが万葉の歌より、いまの僕の心に近いといへば、それは僕の心がかげ日向多く、うつくしきもの念ふことしきりだといふのだらう。万葉集とは童謡のごとく面白いが、何だか身近ではない。」（昭和九年七月十五日付、小場晴夫宛。信濃追分。）

立原君の詩歌に対する考へ方は、最後までかはらなかつたやうに思ふが、これはもつとよく考へてみなければならないとしても、少くとも私のやうに物語的なものを詩にもつてゆかうとしたり、曲りなりにも何らかのイデオロギーを表はさうとしたりするものを、ひどくいやがつてゐたことは、その作品も詩論も生活も、すべてがこれを証明する。彼の死は昭和十四年三月で、病名は肺結核、伊東静雄と同病である。この二人の詩人に共通のものは、しかし病気だけではない。純粋に詩人であつたことがとりわけ注目に値するが、それはこの短い文章では書き表はせるはずもなかつた。いつか改めてゆつくり道造論を書かねばならないと思ふ。これはその予告みたいなものである。

歌會報　九月

本社例会　十八日、中之島サムハラ神社で開く。出席者二十八名。
自らを責むるこころに到り得てこの恵り
にも救ひがありき（6点）　平井　章子
石垣にのうぜんかつら咲かしめてかの洋
館は海へゆく道（同）　田中　良子

神戸支社一周年記念歌会　四日、住吉の岡部伊都子宅で開く。杉山楚風、笹井のぶ子等十三名出席。青風先生の歌話等を聞き会後小宴を張り歓談。
しげくなる雨に窓しめあにいもと一つの
ピンのシャボン玉ふく（7点）　長原　雪生
漂着せし鳥の骸は午後二時の干潟に汚点
となりて光りつ（5点）　輔老　完

尼崎支社二周年記念歌会　十一日、神田南通の原玉泉宅で開く。青風先生を初め磯村嘉千雄、長原雪生等十九名出席。
紅厚く咲きて傾くけしの花痛みもつ風の
強き夜となる（9点）　中川　美子
とある家の團欒が見ゆ病む君と別れ来し
道窓ひらきゐて（8点）　松田美智子

三原支社例會　十日、帝人三原莊で開く。佐藤正等十二名出席。
香りなき白菊のある病室にオーネストジ
ョンとおぼえればならぬ　後藤　善積

徳島支社例会　十一日、徳島市教育研究所で開く。七条節子等六名出席。
さまざまに部屋かざり居るこの日頃女の
幸をしみじみ思ふ　小川美喜子

京都支社例会　十七日、宮本周子宅で開く。
高久芳術夫妻等八名出席。
紫のネオンの塔をひらりひらり都会の猫
が夜にて動く　佐藤美智子

世界長歌会例会　二十二日、世界長ゴム第一会議室で開く。夏至雅博等六名出席。
こころよき熟睡の朝を誰か来てインクの
壺を充してゆけり　磯村嘉千雄

東京支社例会　二十四日、馬橋の柳瀬あや宅で開く。鮎貝久仁子等五名出席。
その母を養ひつつ三十路近きとふ小学教
師のヘップバーン見つ　吉村　栄一

西宮支社例会　二十四日、武庫之荘の田中史子宅で開く。今村惠子等十四名出席。
形なきものが奪ひぬみんなみんな私のも
のだもう一度返せ　藤沢　昭子

北攝歌会例会　二十五日、箕面町宮崎定子宅で開く。山本信実等十三名出席。
遠山に光るものあり危くも身を支へつつ
窓ガラス拭く　阿部　漂二

太子・龍野支社合同歌会　二十五日、太子町公民館で開く。西村久雄、首藤忠、前田孝等十三名出席。
犬ひきて妄念淡きある宵は露結ばしむ稲
の葉豆の葉　畑山　軍治

阪南歌会例会　二十五日、北畠の岸本千代宅で開く。浦林繁樹等八名出席。
ガラス器に魚など育てうつうつと企みも
なき夏の日が過ぐ　三木　謙爾

社中消息

○安田　青風　「二人の作家について」を「ポトナム」十月号に発表。十月十六日、短歌選評をBKより放送。

○安田　章生　「脱出」二十首を「短歌研究」十月号に発表。

○岡部伊都子　「虫千」（十月十六日）を、ラジオ東京より放送。

○角谷かおる　歌集「花籠」を和歌山市桜屋書房より新刊。

新入社友

（氏名）	（住所）	（紹介者）
西尾　昭男	大阪	
梅沢　道治	奈良	
友成　一	大阪	
小松　翠	奈良	
和田　保	和歌山	
森　扶子	同	角谷かおる
竹本　与一	同	同
山本　久雄	同	和田　保
久保田　弘子	同	同
御前　喜久子	同	
西村　重和	同	久保田弘子
栗栖　安一	同	安田青風
野田　正子	吹田	佐藤美知子
森下　佐代子	同	同

白珠社清規抄

入社
・入社希望者は、氏名、年齢、職業、歌歴を明記の上、社費三ケ月以上を添へ申込みのこと。

同人社友
・同人、準同人、社友、誌友を以て組織し、同人、準同人は社友の中から力量充実した作家を推薦する。誌友は、雑誌購読のみで投稿は出来ない。
（同人、準同人規定は別に定める。なほ特別社友の規定もある）

社費
・一ケ月社友七十円、誌友六十円。
（申出により寡養者、学生は誌友並、同一家族は一人を除き他は半額）
・社費切の時は直ちに送金のこと。退社の時はその旨申し出ること。
・送金の時は所属欄名を明記しなるべく振替を利用のこと。

投稿
・毎月、短歌十首以内及び文章等随意投稿のこと。但し毎月一日を以て翌々月号の分を締切る。
・原稿は原稿用紙に書き、初めに所属欄名及び住所氏名を明記のこと。

添則
・一回十首限り、添削料二百円。宛名明記、切手貼附の返送用封筒同封の上申込みのこと。

編集後記

○白珠同人選集の第二集として、「野の鳥」が出来上つた。美しい歌集である。親しい同行を祝福し激励する意味からも一本をお求め願へると幸ひである。また、同集の読後感を募集したいと思ふ。枚数は自由、締切は一月十日といふことでお願ひする。

○本号から栗栖安一氏を同人として迎へた。氏は国学院大学の出身で、釈迢空の古い門下の一人である。現在は和歌山縣職員研修所長をされ、毎日新聞和歌山版の歌壇の選者もされてゐる。御紹介申し上げる。なほ、従来、和歌山市には数名の社友の方がをられたが、栗栖氏の入社を機に、支社が結成されることとなり、十一月二十日に創立歌会が開かれることに決定してゐる。この歌会はまた同支社の角谷かおる氏の歌集「花籠」の出版記念の会をも兼ねることとなつてゐる。これ又、心から祝福し、同支社の隆盛に赴くことを期待したい。

○早いもので、本年度も本号で終りとなる。われわれの歩みは遅々としてゐるかもしれぬが、しかし、雑誌としてはまづ順調な道程であつたと思ふ。それにつけしば二つの特集倍大号をも刊行した。これらのことは社中の方々の御盡力、また社外大方の御高援のたまものである。ここに改めて感謝したい。また、とくに編集その他の面倒な雑務にあたつて頂いた方々にも厚く御禮申したい。われわれは更に努力し、白珠をしていよいよ気持のよい集團たらしめよう。われわれの詠む歌が少しでもお互の心に生きる喜びと力とを与へるやうなものであるやうにしよう。歌を通しての深い厚い友情を大切なものとして生きて行かう。御健康で越年されることをお祈り申し上げる。

○本号には田中克己氏に三たび詩人の思ひ出を書いて頂き、入山雄一、早瀬譲両氏からも御寄稿を得た。御厚禮申し上げる。五回にわたつた石丸先生の批評文も本号で終つた。御多忙中長い間玉稿を賜はつたことについて深謝申し上げる。（章生）

十二月歌会案内

・十二月十一日　天王寺区餌差町契神記念館（市電上本町四丁目下車、東へ一丁北側）
午後〇時半—四時半。
・近詠一首　十二月五日までに左記へ送付のこと。
・当日会費　三十円。
尼崎市元浜町二ノ二七　尼崎寮
長原　雪生

白珠　第十卷第十二号
定価　六十円
昭和三十年十一月二十日印刷
昭和三十年十二月一日発行
豊中市本町三丁目二三五
編集兼発行者　安田喜一郎
大阪市北区芝田町九七
印刷者　小山壽夫
大阪市北区芝田町九七
印刷所　新星印刷KK
大阪府豊中局区内本町三丁目二三五
発行所　白珠社
電話豊中五一三六番
振替大阪一〇三三九〇番